

主 題：教会のあるべき姿 = 成長
聖書箇所：エペソ人への手紙 4章1-3節

テーマ：聖書の教える教会のあるべき姿とは？

聖書が教えている教会のあるべき姿とはいったい何か？主が喜んでくださる教会であり続けるために決して揺るがしてはならない基盤とは何か？私たちはこの「教会」というテーマについてここ2回にわたって考えてきました。主がどのような教会であることを私たちに望んでおられるのか、その姿がより鮮明に見えてきたでしょうか？

私たちが最初に見たのは、「教会の土台」についてでした。教会というのはイエス・キリストが生ける神の御子であることを信じるその信仰告白の上に堅く立ち、みことばの権威にいつも従って生きようとする主に召し出された人々の集まりでした。主ご自身が教会のかしらであるからこそ、建設者であるからこそ、この主の教会はだれに邪魔されることもなく堅く建て上げられ続けていくのです。教会はそんな揺るがない土台の上に据えられているものでした。また先週、それに続いて私たちが見たのは、「教会に与えられた使命」でした。主はご自身の教会をどのような土台の上に建て上げるのか、その青写真を示しただけでなく、この地上にあって教会がどのような働きをなしていくべきなのか、その使命についてもはっきりと教えておられました。その使命とは私たちが「弟子を作る」ということでした。教会というのは、確かな土台の上に立ってさえいれば後は何をしてもいいわけではありません。私たちはみな、みずから出て行って、救いをまだ知らない人に福音を宣べ伝え、救いを受け入れた人にはバプテスマを授け、またその人が益々主を愛する者になっていくことが出来るようにその人を教えていくことが求められていたのです。

弟子を作るというこの働きは、教会のリーダーや信仰歴の長い人だけに与えられたものではありません。主によって救われた人はどんな人であってもこの使命に忠実であることが求められていたのです。まだ救われて間もない人も出て行って、自分の上になしてくださったその主の救いのすばらしさ、福音を語ることができます。また、救われ、みことばを学んでそれに従って生き始めた者は、自分が学んだことを別の人に伝えていくことができます。私たちがこの働きを為すことができるのは、何も私たちが知識にあふれて経験を積んで欠けたところのない者になったからではありません。もしそうなら、だれひとりこの責任を果たすことができる者などいません。私たちはいつまでたっても完璧ではありませんし、さまざまな面で不十分な者です。しかし、この使命を忠実になしていくための力や助けを、主ご自身が私たちに与えてくださるからこそ、また、すべてを支配しておられるその権威ある主が私たちといつもともにいてくださるからこそ、私たちは弟子を作っていくことができるのです。

私たちの師である主はすべてにおいて完全なお方です。私たちはまずみことばに従ってこの主と同じようになることを追い求め、他の人も同じようにこの方に似た聖い者へと変わっていくことができるようにと助けを与え続けるのです。私たちはただ知識を身につけさせるのではなく、学んだみことばを実践することができるように励ましていきます。私たちはこうして教え、また教えられながらキリストの弟子を作り、この地上で主の栄光を現わしていくのです。教会にはそのような重大な使命が与えられていました。

さて、教会のあるべき姿、その基盤となる「土台」と「使命」を見た私たち、きょうから数回にわたって考えていきたいこと、それは「教会として成長する」ということです。私たちは主によって召され、神の家族の一員とされた者として、個人として、また教会として成長し続けていかなければいけません。今、同じ土台に立って、また同じ使命を持って生きている私たちが、特にこの地域教会にあって浜寺聖書

教会にあって、みことばに従いキリストのからだをともに建て上げていくのです。どんな時も主を愛して、どんな時もみことばの權威に立って互いの間で学んだことを実践していく。私たちはそのようにしてこの地にあって主のすばらしさを、あかしを教会として立てていくのです。そのことを皆さんひとりひとり心から願っておられると思います。

しかし実際、神の家族として私たちが生きていこうとすれば、そこには難しさやチャレンジというものが伴うことも事実です。残念ながら私たちは救われた後も罪の性質を持った罪人であるがゆえに、本来、互いの成長になることだけをするべきにもかかわらず、自分のことだけを考えて人を傷つけてしまうことがあります。愛を実践するべきなのに赦すことができなかつたり、寛容を示すべきなのに怒って争いを引き起こしてしまうようなことばを口にしてしまつたり、へりくだってみずから進んで仕えるべきなのに仕えられることを望み、自分の思いどおりにならなければ不満を抱いてしまうということもあります。そして、そのような人との争いやすれ違いというものを経験し、また自分の持っている、教会や他の兄弟姉妹に対する期待が何度も裏切られてしまうと、「私にはもう教会や兄弟姉妹なんて必要ない、神様と聖書があれば十分だ。」と言って心を閉ざしてしまうことがあります。また教会に嫌気がさせば、自分の願いや望みを叶えてくれるような別の教会を探してみたり、自分と合わない人から距離を取って関わることをやめ、自分を理解してくれる人だけと一緒にいるようになることもあります。このようなことをこれまでに経験したことはないでしょうか？もしあるなら、今まさにそれを経験しているのだとすれば、どうなのでしょう？ 私たちは神の家族にふさわしい生き方をしているのでしょうか？私たちはこの地にあって主のあかしを立てるのにふさわしい歩みをしているのでしょうか？それとも、この世と何ら変わらないような歩みをしていないのでしょうか？

確実に言えることは、私たちにまだまだ成長しなければならない部分がたくさんあるということです。教会は罪を赦されて新しく造り変えられた者たちの集まりです。性別や年齢、国籍、文化、育ってきた環境も社会的な立場も全然違うさまざまな者たちが、同じ主を愛する家族として一つになって生きていくのです。当然、そこには違いがあります。考え方や価値観も異なることがあります。しかし、同じ土台に立ち、同じ使命が与えられているからこそ、私たちはともに成長し主に喜ばれる集まりへと変わり続けていく必要があるのです。

では、実際にどのようにして私たちは成長していくべきでしょうか？教会が成長していくために、神様はどのようなことを私たちに求めておられるのでしょうか？そのことをパウロの記したエペソ人への手紙4：1-16を通して今一度皆さんと考えてみたいと思います。きょうは1-3節の部分を見ます。

☆教会が成長するために：一致すること

ここでパウロは教会が成長していくために、まず何よりも、「一致」することが大切だと教えています。パウロは教会が成長するために神の家族としてともに歩んでいくために「一致」というものが必要不可欠であると教えています。では、聖書が教えている「一致」とはどのようなものなのでしょう？そして、その「一致」は私たちの間でまたこの教会の中で見られるものなのでしょう？どうか、それぞれがみことばに照らし合わせて自分の歩みを吟味してみてください。そして益々、聖書が教えている、「教会のあるべき姿」にかなった教会としてぜひともに成長していきましょう。

では、そのことを念頭に置いた上できょうのみことばを見たいと思います。本来なら1-6節を見たかったので1-6節をまずお読みします。

エペソ人への手紙4：1-6

「1 さて、主の囚人である私はあなた方に勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。：2 謙遜と柔和の限りをつくし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、：3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。：4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。：5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。：6 すべ

てのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」

1. 一致を保つために欠かせない前提 1 節

教会が成長していく上で大切になるこの「一致」についてパウロは 1 節から語り始めていくのですが、私たちはまずこの 1 節の中で「一致を保つために欠かすことのできない前提」を見ることができます。パウロはこのようにことばでこの箇所を始めていました。「さて、」と。きょうは残念ながらすべてを詳しく見ることはできません。またいつか皆さんとともに学べればと思っています。

パウロが記したこのエペソ人の手紙は大きく二つの部分から成り立っています。前半の部分が 1—3 章まで、後半の部分が 4—6 章になります。パウロはこの前半部分を通して、クリスチャンに与えられたその救いがいかにすばらしい祝福であるのかを何度も何度も教えていました。皆さんもよく知っているとおり、彼は 2 章の中で、この世の者がみな例外なく罪と罪過の中に死んでいた者であるということ、主に従うのではなく自分の肉と心の望むままを行っていた私たちは生まれながらに御怒りを受けるべきそのよう存在であったことを教え、そして本来、罪ゆえに神様のさばきを受けるべきであった私たちを、主が恵みによってあらかじめ定めておられたように選び、救い出してくださったということを記していました。またそれに加えて、この主の血によって贖われた者、罪の赦しを受け入れた者はみな、ユダヤ人も異邦人も関係なくキリストにあって神の家族へと加えられたということも教えていました。エペソ 2 : 19 にはこうあります。「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。」こうして主権者なる神様が偉大な力をもって人々を召し、キリストのからだである教会の一部とくださった、という根拠に基づいて、パウロはこの後半部分の 4 章を語り始めるのです。後半部の 4 章では私たちはさまざまな「勧め」や「命令」を見ることができます。パウロはこう言います。「あなたがたはキリストによって救われ神の家族として今を生きている、そのような者になった。それゆえにその召しにふさわしい生き方をしていきなさい。あなたはキリストによって新しく生まれ変わった者なのだ。さて、私はこれからそれにふさわしい歩みというものはどういうものかを教えていくので、その歩みにふさわしい者として生きていきなさい。」と。

ここで大切なこと、それは、パウロは命令や勧めをなす前に、まず何よりも、彼らが主の前にどのような存在なのか、どのような存在として生きているのかを明らかにしたということです。これからさまざまな「命令」を見ていくのですが、彼らにとってキリストがどのようなことをなされたのか、キリストがいったいだれなのか、どのようなことをなされ、またこれからなしていられるのかを思い起こし続けることがとても大切なことでした。なぜなら、クリスチャンの歩みというのはまず何よりも、確かな前提であるキリストの救いのわざの上に成り立っているからです。私たちの歩みというのは単に、あれをしてはいけませんよ。これはしていいですよ。これはしなければなりませんよ。といったルールを自分の力で守っていくことではありません。自分を救ってくださったキリストの恵みがいかにすばらしいものか、いかに偉大なものなのかを常に覚え、この方の助けを祈り求めながらみことばに従っていくのです。パウロは信仰生活の歩みに欠かせないものが主の力であると分かっていたからこそ、3 章の後半でこのように祈っていました。3 : 16—21 を見てください。「:16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなた方の内なる人を強くしてくださいますように。:17 こうしてキリストが、あなた方の信仰によって、あなた方の心の内に住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなた方が、:18 すべての生徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、:19 人知を遥かに超えたキリストの愛を知ることができますように。こうして神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。:20 どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、:21 教会により、またキリストイエスにより、栄光が、代々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン」4 : 1 「さて、」と続けていくわけです。ですか

ら、私たちが一致を保つために欠かすことができないこと、それはまず、この主がいったいだれなのか？この方が自分に対して何をなして下さったのか？そのことを覚え続けることです。

私たちは日々の生活の中で時に、主のみことばに対して従わなければいけないのはわかっているけど、でもできない、でも難しい。そのように感じてしまうことがあるかもしれません。あまりにも要求されていることが難しければ、私たちは戸惑ってしまったり不安になってしまうことがあります。確かに、私たちは自分の力や知恵によってみことばに従っていくことなど絶対にできません。しかし、みことばに従っていくことが難しく感じるそんな時こそ、「どうか主よ、助けてください。信仰を強めて自分の思いではなく主に従うことができるようにその力を与えてください。」と祈っていくことができるのです。私たちには、私たちの必要や弱さを覚えていてくださるその主に信頼することができます。そしてこの方に祈って委ねることで、この方は私たちに必要な助けを備えてくださるのです。私たちは主が召して下さったからこそ、この召しにふさわしい生き方をしていかなければいけません。しかし同時に、この方が私たちを召して下さったからこそ、私たちはその生き方をしていくことが可能になったのです。主が私たちとともにいてくださるからこそ、主が私たちを恵みによって救い出してくださったからこそ、私たちはそれにふさわしい歩みをしていくことが可能になりました。

だからもし、この主がなされたことがどのようなものなのかまだわからないと言われる方がおられるなら、きょうまず何よりもそのことを知ってください。みことばはこのように言っています。イザヤ書53：6「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分勝手な道に向かっていった。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」生まれながらの私たちはまるで羊のようにさまよっていました。この世界の創造主であり私たちを造って下さった神様に関心を払おうとせずこの方に従おうともせず、自分の人生を自分のために生きていたのです。だれひとりとして、それが間違っているともおかしなことだとも考えることなく、聖く正しい神様が忌み嫌われるようなことを平気で行ってきました。そして自分は何をしても大丈夫、自分はどんなことをしたとしても何の問題もないと思い込んで生きていたのです。

しかし、そのような者を主は「良し」とされません。そのままでは絶対に「良し」とはされないのです。このような者には必ず神様からの正しいさばきがあると、聖書ははっきり教えています。私たちはだれひとりとしてこの聖い神の前にふさわしい歩みをしている者などいません。みなが地獄で、自分の歩みにふさわしいその永遠のさばきを受けるにのみ値する存在だったのです。しかしそんな愚かであろうもない私たちのために主が救いの道を備えてくださいました。人としてこの地上に来られた神の子イエス・キリストが、私たちが本来受けるべきだったその罰を受けて、代わりに十字架にかかって死んでくださったのです。私たちが何かをしたからではなく、私たちがそれに値するすばらしい良い人物だったからでもありません。私たちはみな神様に背を向けて、羊のように自分勝手に道を歩んでいました。しかし、そんな私たちに主が一方的なあわれみを示して下さり、さまよっていた私たちを主が探し出してくださって、恵みによって私たちの心を変え、救い出してくださったのです。そしてこれまでの生き方を主の前に悔い改めてこの方を自分の主として救い主として受け入れて信じ従うのであれば、その者に救いが、その者に永遠のいのちが与えられるという約束を与えてくださいました。

皆さん、必ずそれぞれが主の前に立つ日はやって来ます。ですからどうか、今この時間がある時にこの救いを自分のこととして受け入れてください。この祝福を自分のこととして受け入れ、この方のために、きょうから新しい生き方、新しい歩みを始めてください。この方はどんな人の心でも変えることができる、そんな偉大な力のある救い主、神であります。

この主を愛し、この方によって神の家族にすでに加えられた皆さん、私たちが一致するための鍵はどこにあるのか、それはまずこの主にあります。この主をいつも私たちが覚え続けることです。そしてこの方の力により頼んで教会として成長していくのです。キリストの持つこの力こそが、教会が一致していく上で一致を保つための前提になるのです。

2. 一致を保つために欠かせない態度 2-3節

●一致を保つために持つべき五つの態度

さて、この前提に基づいて、パウロは2-3節の中で続けて「一致を保つために欠かすことのできない態度」について記しています。特にパウロは主に召された者として神の家族として生きるのにふさわしい心の態度をここで五つ挙げてくれています。ではどのようなものとして歩いていくべきなのか、そのことを一つ一つよく考えてみましょう。

a. 謙遜であること 2 a 節

まず一つ目の態度として挙げられているもの、それは「謙遜」であることです。教会が一致を保つために私たちはまず自分自身をへりくだらせる必要があるのだとパウロは教えています。この「謙遜」に関してパウロはピリピ2:3の所でもこのように教えていました。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれたものと思いなさい。」「謙遜」であるとはそもそもいったいどういうことでしょうか？それは「自己中心的でないこと、自分のことを考えることよりもへりくだって他の人のためになることを喜んで追い求めていくこと」です。謙遜な人というのはいつも周りの人にとって益となることを率先して行おうとします。

なぜ謙遜であることが教会の一致を保つ上で大切なのでしょうか？なぜ私たちは自己中心的でプライドにあふれた者であってはいけないのでしょうか？もちろんさまざま理由を挙げることはできますが、一つ確実に言えることは「プライド」というものがさまざまな罪を引き起こすからです。プライドにあふれた人物はその問題を抱えているだけではなく、さまざまな問題を引き起こし、他の人に色々な罪の影響与えることがあるのです。

思い返せば、この世で最初に罪を犯したサタンの動機にあったもの、それも「プライド」でした。彼は自分が天に上り、いと高き方、神様のようになろうとしたのです。またアダムとエバが罪を犯したのも、彼らが神様に信頼して従うことよりも、自分たちが神様のようになることを望んだからでした。

プライドは、その人物のうちから神様の存在を忘れさせるという影響を与えるのです。申命記8:14でもこのように書かれています。「あなたの心が高ぶり、あなたの神、主を忘れる、そういうことがないように。」と。ですからもし私たちの心がプライドに支配されてしまえば、私たちの心が高ぶってしまえば、私たちは主を忘れて主の前に喜ばれないことをしてしまうだけでなく、自分がすべてのことにおいて一番となり、周りの人に対しても思いやりを示すことができなくなるのです。私たちがみな、他の兄弟姉妹を省みることよりも自分が望むことを何よりも求めるようになってしまえば、想像にたやすいことですが、そのような群は内側から崩壊してしまいます。だからこそ、神の家族として歩いていくためにはプライドを捨て、謙遜を身に付けていくことが大切になるのです。

では、私たちはどのような時に謙遜になることを忘れ、自分を誇ってしまいやすいのでしょうか？ある人にとっては自分の能力や才能かもしれません。ある人にとっては自分の持ち物や社会での立場かもしれません。また、ある人にとっては自分が積み上げてきた経験や持っている価値観かもしれません。たとえ、それがどんなものであったとしても、もし私たちが他の人の益になることよりも自分を優先して自分の思いどおりになることを望んで行動しているのであれば、それは主の前に喜ばれないものだということです。皆さん、私たちはいつも自分のことを優先して生きているのでしょうか？それとも神をそして周りの人を優先して生きているのでしょうか？私たちは兄弟姉妹のために どのようなものを犠牲にすることができるのでしょうか？

私たちの最高の模範である主は、へりくだって人としてこの地上に来てくださり、そして私たちのためにいのちをささげてくださいました。ピリピ2:6-8「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」皆さん、これが

私たちの師の姿です。私たちはこの方のようになっていきたいと願って、教会として互いに仕え合っていくのです。それなら、私たちは喜んで相手の必要を満たそうとしているでしょうか？私たちが相手の必要を満たそうとするとき、そこには時間や体力、また、ときにはお金といったようなあらゆるものを犠牲にしなればいけないかもしれません。それでも私たちは喜んでその犠牲を払うことができるでしょうか？

また私たちは相手の成功を心から喜べるでしょうか？たとえば、自分がずっと願っていたものを相手の人が手にしたとしたら、私たちはそのことを自分のことのように心から喜べるでしょうか？それとも、どうしてあの人が..と、自分のことを考えてしまわないでしょうか？もし、私たちがどのようなことをするにも、自分というものが私たちのうちにあれば、私たちは他の人のことを考えたり、神様のことを考えることが難しくなります。私たちに求められていることは、主の模範を覚えることです。主は私たちのためにいのちさえも犠牲にしてくださいました。その主の模範に倣って、私たちにもへりくだることが求められています。神の家族はみずからをそのようにしてへりくだらせる、その謙遜な態度を持って一致を保っていきましょうとするのです。

b. 柔和であること 2 b 節

二つ目の態度として挙げられていたのは「柔和」であることです。教会の一致を保つためには、カッと怒りやすい者ではなく、温和で親切な者でなくてはなりません。しかし間違っほしくないのは、この柔和であるということ、柔和な人というのは、どんなことに対しても全く怒らない弱々しい人のことを指しているのではないということです。少し、イエス様の姿を思い出してほしいのですが、イエス様こそ、そのことばにおいても、行動においても心優しい人物でした。私たちがよく知っているマタイ 11 : 28 - 29 には、まさにその主の柔和な心が明白に記されています。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」主はまさにこのことばどおりに自分のもとに来る者を愛し、病気や怪我の者たちを癒し、人々のかかえている必要を進んで満たそうとされていました。またそれだけではなく、ご自身を苦しめ、十字架にかけて殺そうとしている者たちのためにも赦しを祈られたのです。ルカ 23 : 34 ではこのようにあります。

「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」」確かにこのように見ると、主は柔和な人物でした。心優しい人物だったのです。

しかし同時に、この同じ主は宮の中で商売している者たちをご覧になったときに怒って彼らをそこから追い出されました。柔和な人というのはいっさい怒らない人物ではありません。神様やみことばに反することがなされていれば、それに対しては正しい怒りを持つのです。柔和な人とは、自分自身が何かをされたときにはやり返すのではなくいつも親切に接し、逆にだれか他の人、兄弟姉妹や、また、みことばや神様が不当な扱いを受けているのであれば、その相手に対して怒りを示すということです。自分自身が何かをされれば、それには忍耐を持って親切に接し、逆に自分以外のだれかが不当な扱いを受けているのであればその者たちのために自分が出て行って怒りを示す。自分自身を守るために力を使うのではなく、他の人を守るために自分の力を使うのです。

では、私たちはこのような柔和な者として互いの間で仕え合おうとしているのでしょうか？私たちが自分が責められたり不当に扱われるなら自己防衛に走ってしまい、自分を守るためなら色んな方法で相手にやり返してしまうということがあります。皆さん、これは大切なことなのでよく覚えていてください。柔和な人というの、別にやり返す力がないのではありません。柔和な人はやり返す力を持っているし、場合によってはそれを行行使する権利さえ持っているかもしれません。しかしそれを意志を持ってしないのです。柔和な人はやり返すことができても、意志を持ってそれをせず、かえって喜んでその人を赦して、人々の抱えている必要を満たそうとしていく者なのです。神の家族は模範である主がそのようであ

ったように柔和な態度を示すことによって一致を保とうとするのだと教えています。私たちが神の家族として成長していこうとするのであれば、私たちはこのような柔和な態度でお互いに接することが必要になります。

c. 寛容を示す 2c 節

三つ目の態度として挙げられているのは「寛容を示す」ことです。このことばは、「人や物に対して忍耐を持って接する」とか「我慢をする」といった意味を持っています。教会が一致を保つためにはどのような状況にあっても、またどのような相手であったとしても、私たちは忍耐を持って接することが求められているのです。私たちの歩みは、結果がすぐに見えなくとも、希望を捨てずに希望を持って、忍耐を持って待ち続けるというものでしょうか？それとも、自分の望んでいるような変化が見られなければ、相手にイライラしたり、またその状況に失望して諦めてしまうようなものでしょうか？少し考えてみてください。ある人が種を蒔いて農作物を育て始めたとします。土を耕して草を刈り水を撒きます。しかし、その人が自分の思い描いていたタイミングで実が実らないと言って、そのことに腹を立てて我慢できずに畑を掘り起こし返し始めたとしたら、皆さんはその人に対してどんなことばを掛けるでしょう？おそらく「もう少し落ち着いて忍耐を持って待っていなさい。実が出るのには時間がかかるから待っていなさい。」と言わないでしょうか？

同じように私たちが何かの結果を見ようとすれば、それには時間がかかることがあります。忍耐を持って接する必要があるのです。しかし現実の生活はどうでしょう。私たちは色んなことに対してすぐに結果を求めてしまったり、自分の中で勝手に自分の忍耐の基準を作ってはいないでしょうか？自分の中にある程度の限界点があって、自分の一定の限度を超えれば我慢できずに爆発してしまうようなことはないでしょうか？

色んな考えや価値観を持ち、さまざまな点で異なる兄弟姉妹とともに神の家族として生きていこうとすれば、私たちは「寛容」でなくてははいけません。弟子を作っていこうとするその過程において、相手は何度も失敗するかもしれません。思いどおりにことが進まずに、自分のやってきたことに対して意味を見出すことが難しく感じることもあるかもしれません。でも、もし私たちが毎回そのような自分の勝手に決めた基準で、「私はこれ以上無理です。」などと言っていたなら、そのような教会は成長していけるのでしょうか？私たちは忍耐をもって互いに仕え合っていくことが求められているのです。もし忍耐を持つことが難しいと感じる場面に出くわした時には、私たちに対する神様の忍耐の姿を思い出すことです。

ローマ2：4には「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」とあります。私たちが罪を犯して神様を悲しませるようなことを何度も繰り返していたとしても、神様はそのことに対して忍耐を持って接してくださっていました。主は私たちを一瞬のうちに滅ぼすことができたにもかかわらず、私たちに変わらずあわれみを示し続けてくださったのです。もし主が忍耐を持っていなかったとすれば、この地上のすべての者が滅ぼされてしまっていたことでしょう。私たちはこの深い神様のあわれみを知っています。そうであるなら、それにふさわしい歩みをしているのでしょうか？私たちの基準はどこにあるのでしょうか？師であるイエス・キリストの基準でしょうか？それとも自分自身が勝手に築き上げたそのような基準でしょうか？神の家族は神様があわれみを持って私たちに接してくださっているように、忍耐を働かせて互いに仕え合っていくことを通して一致を保とうとするのです。

d. 愛をもって互いに忍び合うこと 2d 節

四つ目は「愛を持って互いに忍び合う」ことです。私たちは互いの間でただ忍耐を働かせるだけでなく、それを「愛を持って」実践していくことが求められています。教会が一致を保っていく上でこの「愛」というものは絶対に欠かすことができないものです。ここで「愛」と訳されていることばは皆さんもよく知っ

ている「アガペーの愛」です。つまり私たちには犠牲を払って無条件で相手のしたことを赦す、そのような愛が求められています。

私たちにとって神様を愛することは比較的容易なことかもしれません。私たちは神様に対してどんなことでも打ち明けることができますし、また偉大な力を持った神様が私たちとともにいつもいて離れないでいてくださると確信することができるからです。ですから、私たちは神様を愛することに関して問題を持つことはあまりないかもしれません。しかし、人を愛するということになると話は変わってきます。私たちはどれだけ愛を示そうとも、裏切られたり、がっかりさせられることがあります。相手に期待していたとしても自分の思いどおりにならないことが多々あります。自分の求めていることとは別のものが返ってきたり、また何気ない一言で傷つけられてしまうこともあります。

だから、私たちの周りにはいつもこのような誘惑があるのです。どんな誘惑か皆さんわかりますか？自分のことを受け入れてくれる人とだけ一緒にいて、そうでない人とは距離をとってあまり関わらないようにしようとする、その誘惑です。私たちは神様のことを愛することができます。でも、人を愛そうと思った時に難しさを感じて、難しそうな人とは特に距離をとってその人には関わらないようにしようします。皆さん、そのような誘惑に負けてしまったことはこれまでないでしょうか？私たちにとって自分を愛してくれる人を愛すること、それは簡単なことです。でも、そのことについてイエス様はこのように言われました。マタイ5：46「自分を愛してくれるものを愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。」イエス様がここで何を言わんとしていたのか、わかりますか？それは自分を愛してくれるものだけを愛するのであれば、その生き方はこの世のものとは何ら変わらないということです。自分を愛してくれる人を愛するのは、救われていない人にもできます。この世の、救いを知らない人でも友人を作ることができますし、自分と気の合う者たちと一緒に付き合っていくこともできます。

でも、自分とは合わない、自分を傷つけに来るような者を愛するためには、キリストの助けが必要になります。キリストの福音を知っている者だけが、このことを実践することができるのです。私たちはキリストがあのかの十字架の上で明らかにしてくださった神様の愛を知っています。そうだとすれば、その愛によって神の家族に召された私たちは、互いの間でどのような愛を実践しているのでしょうか？私たちの愛は周りの人にどのように映っているのでしょうか？この世と同じようなものなのでしょうか？それとも主を知らない人には理解できないキリストに根ざした愛でしょうか？神の家族はキリストを通して示されたこの神様の愛を覚え、その「愛をもって互いに忍び合う」ことで一致を保とうとするのです。

e. 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保つ 2 d 節

そして最後五つ目は「平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保つ」ことです。この態度を私たちが理解していく上でポイントとなることばが二つあります。それは「熱心に保つ」というのと「平和の絆で結ばれる」ということばです。

a) 熱心に保つ

まずパウロは「熱心に保ちなさい」と言っていました。ここで注意していただきたいのは、彼は「一致を築き上げていきなさい」とも、「作っていきなさい」とも言わなかったということです。彼は「一致を保ちなさい」と命じました。つまり、私たちの責任は一致を新たに作り出していくことではなく、すでに存在している一致を失わないように、壊さないように守っていくことだということです。「一致」というものはもうすでに存在していて、その一致を守っていくこと、保っていくことが私たちの責任だということです。教会に存在するその一致は人の努力や知恵によって作られるものではなく、聖霊なる神様の働きによってもたらされるものだからです。パウロは第一コリント12：12、13のところで「：12ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はいくら多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。：13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、

奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべてのものが一つの御霊を飲む者とされたからです。」と言っています。神の家族である教会というものは、キリストにあって、御霊の働きによって一致が生み出され、その群に属する者たちはその一致を保っていくために、召された者にふさわしい生き方を熱心にしていくのです。

ですから、もし私たちが自分たちだけのことを考えて、自分たちの思いや感情、また自分たちの権利を守ることを優先しているのであれば、たとえそれが直接的に他の人に関わらないような迷惑をかけていないことであつたとしても、教会の一致を乱していることになるのです。皆さん、私たちは召し出された者として、それにふさわしい生き方をしていくことを通して一致を保っていきます。私たちは召された者にふさわしい生き方をきょう熱心に求めながら生きていくのでしょうか？

b) 平和のきずなで結ばれる

次のポイントとなる二つ目のことばは「平和のきずなで結ばれる」ということです。こうして見てきたように主は教会に対して一致を保っていくことを求めておられました。でも、この一致を求めておられる主は何も、私たちがそれぞれの個性や性格などを押し殺してみんな同じように考え振る舞う、そんな集まりになることを望んでおられるわけではありません。私たちはクローンを造り出しているわけではないのです。一致というのは、個性や性格また賜物など人それぞれいろんな違いがある中で、同じ目的を持ち、同じ心を持ち、同じ福音に立って生きていくということです。そして、さまざまな人がいる中でその一致を保っていく、同じ目標を持ち同じところに立って生きていくためには、互いの間で平和のきずなが固く結ばれていることが欠かすことはできないのです。

◎平和を保つために.. 平和を保つ者とは？

みことばは「平和」を追い求めていくことが大切だ、ということを繰り返し教えています。たとえば、パウロはローマ書 12 : 18 でこのように言っていました。「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。」すべての人と平和を保っていくことが命じられていたのです。

では、実際、私たちはどのようにして互いの間で平和を保っていくのでしょうか？神の家族にあって平和を築く者とはどのような存在なのでしょう？少なくとも二つのことが言えると思います。

① 正直になること

一つ目に平和を築いていくためには「正直になること」が必要になります。神の家族の間で平和を築いていこうとする者は問題や争いが起きているなら、それらを見て見ぬふりをしようとはしません。残念ながら人との間には争いや問題は起きてしまいます。私たちもよく経験がありますが、自分の意思を完全に伝えることができなかつたり、また相手の言うことを正しく理解できなかつたりします。コミュニケーションの中で起こるズレによって、間違つた考えや偏見、疑いといったものが内側に出てきて、人々の間にすれ違いや意見の衝突などが引き起こされてしまうことがあります。

そのような問題や争いが起こつた時、私たちの自然な応答とはどのようなものでしょう？私たちの自然な応答は、そういった問題や争いに対して逃げ出したり、あたかも何も問題がなく大丈夫であるかのように振る舞うことかもしれません。実際には問題があつたとしても、関わつたら大変なことになることがわかっている時、私たちはそのようなものを見ないようにして、何も問題がないかのように振る舞うのです。しかし平和を築こうとする者は、聖霊なる神様の助けによって正直に問題があることを認め、愛と忍耐を持って起こつた問題にみずから向き合おうとするのです。その者は群れの中、教会の中に問題があること、問題が起こつて平和が保てていないことを重要視するのです。だからこそ、それに正直に向き合おうとします。そしてもし、自分の犯した過ちがあれば、自分が間違つたことをしたのであればそのことを素直に認め、それを告白して悔い改めて歩んでいこうとします。

② 喜んで犠牲を払う

二つ目は、平和を築いていこうとする者は、「平和を築くためにかかるその犠牲を喜んで払おうとする」ということです。私たちもよくわかるように、問題について人と話し合おうとすれば勇気が必要になります。聞きたくないような話を私たちが話そうとする時、私たちはそれをためらいます。痛みを覚悟しなければいけないこともあります。しかし平和を築いていこうとする者は主が命じておられるのなら、また何よりも神の家族として成長していくことを望むので、相手がどうであったとしても自分から謙遜、柔和な心、忍耐を持って、主を愛した同じ教会の家族を愛するその思いでもって互いの間で平和を追い求めていこうとするのです。その人は自分が属するその神の家族が成長していくことを望み、そのことに掛る犠牲がどのようなものであったとしても平和を求めていこうとします。私たちはそのような平和を築くような者としてきょう歩んでいるのでしょうか？神の家族は御霊の働きによって生み出されたその一致を、問題や争いから逃げ出すことなく、互いに平和を追い求めることによって保とうとしていくのです。

五つの態度を見ました。確かに、考えれば考えるほど神様が求めておられることは 基準が高いものだと見ることができます。でも、1節にもあったように私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちが召してくださった方がおられるから、私たちが召してくださった方がこのような「命令」を与えておられるからこそ、私たちはそれを行っていくことができる、ということです。自分の力で行うのではなく、私たちの主がともにいてくださるからこそ、召された者として召しにふさわしい生き方をしていくことができます。問題はそれに対して私たちがどのように誠実に向き合っているかです。

〇まとめ

きょうは教会が成長していくために、特に教会にあって一致を保つということがどういうことかをもとに考えました。どうだったでしょう？性別や年齢、国籍や文化また性格や個性、育ってきた環境も社会的な立場もいろいろに異なるさまざまな者たちが、同じ主に召されたその神の家族として一つになって主のために生きていくのです。そのために皆さん、成長していかなければいけない部分が私たちのうちにたくさんありますよね。

そんな皆さんに最後覚えてほしいのは、この手紙を書き送ったパウロは自分のことを 1節のところで「主の囚人」だと言っていました。彼はそのことばどおり主のためにすべてをささげて、この方に従い、その信仰のゆえにローマに投獄されていました。あす自分がどのような目に遭うのか、いのちが絶たれるのかもわからないそのような中であっても、彼の心にあったのは自分のことではなく、エペソの兄弟姉妹たちのことでした。彼にとって何よりも大切だったこと、それは愛する者たちが神の家族としてそれにふさわしい生き方をしていくことだったのです。パウロは自分のことではなく、神のことを考えそして兄弟姉妹たちのことを優先して生きる、そのような人物でした。そのような愛にあふれ情熱にあふれた人物でした。

皆さん、私たちも、キリストに倣って生きようとしていたこのパウロの姿に倣って成長していきたいと思いませんか。私たちにはそのことを可能にしてくださる神がともにいてくださいます。私たちもこのようにして生きていくことができるのです。謙遜になり、柔和な心を持って忍耐を示し、そして愛をすべての動機として互いの間で平和を求め、一致していく。そのような神の家族として主に喜ばれる教会として益々ともに成長していきましょう。